

NLP から見た VT 法

川 口 義 一

本稿は、難聴者の発音矯正や外国語の発音指導に応用され成果をあげている、ベルボ=トナル・メソッド (Verbo-Tonal Method 以下、「VT 法」と略称) という教授法を、ニューロ=リングイスティック・プログラミング (Neuro-Linguistic Programming 以下、「NLP」と略称) という学習理論の理論的枠組みから検討し、その有効性を分析しようとする試みである。

I. VT 法について

VT 法は、ユーゴスラビアのペタル・グベリナ (Petar GUBERINA) 博士が開発した、音声の知覚や習得に関する理論¹⁾の応用的側面の呼称であるが、はじめは難聴者の知覚異常の研究をきっかけとして生まれ、のちに外国語教授法に応用されるようになった²⁾ものである。VT 法によれば、人間が外部の音声記号を把握するというのは、耳に入ってくるすべての音声入力信号に対し、脳のレベルである特定の周波数帯域を選択することによって構造化することであり、聴覚障害は、この特定の周波数帯域が聴覚障害のために狭い範囲に限定を受けることによって生じるものである。この仮説から、VT 法では、聴覚障害者の音声矯正や発音訓練に際して、聴

1) この理論は、「言調聴覚論」(Verbo-Tonal System) と呼ばれるものである。この理論については、参考文献の項の、ロベルジュ (1973)、ロベルジュ (1979)、ルナール & ロベルジュ (1983) を参照されたい。

2) 「サン・クルー=クレディフ方式」の基礎として知られる「全体構造視覚聴覚方式」(または「スガヴ方式」) がこれである。

き取れない周波数帯域の入力信号を強めて与える方法を退け、聴力が残っている周波数帯域に集中的に働きかけることによってその障害者の聴覚器官に固有の聴き取りの機構を再構造化する方法を提唱している。

この理論に基づいて、聴覚障害者の発音教育を行うために、二つの具体的な手段が活用される。一つは「〈SUVAG〉 機器」であり、もう一つは「身体リズム運動」である。「〈SUVAG〉 機器」は、音声の周波数を任意の帯域で分断できるフィルター機器であり、これによって障害者の聴覚機構に介入しそれを操作して、弁別力の改善を促進する³⁾ものである。「〈SUVAG〉 機器」の利用が、外部から聴力の回復を計るものだとすれば、もう一つの「身体リズム運動」はこれを障害者の内部から行う手段である。

「身体リズム運動」とは、聴覚障害者の発音訓練に際して、音声の生成を助けるような動作を用いることである。例えば、障害者から [ka] の発音を引き出すときには、次のような動作⁴⁾を行わせて、無声破裂音の緊張と広母音の口の開け方を体得させる。

手の平を外側に向けて、両手を顔の前で重ね合わせる。次に、両手をすばやく大きく横に広げる。この動きによって首が硬直し、顔が自然に前方に突き出る感じになる。

このような単音矯正からさらに単語・文などの発音に進む場合は、イントネーションの昇降の形やアクセントの強弱によるリズムグループなどの超分節的な要素に注目し、単音が調音しやすく、かつ当該の言語にとって基本的なイントネーションやリズムグループを選び、これを動作で実現するような身体運動⁵⁾を設定して障害者に行わせるのである。

3) 「SUVAG 機器」のハードウェアの説明、同機器を使った音声訓練については、クロード・ロベルジュ、吉川雅博共著『スヴァグ (SUVAG) 機器の紹介』(上智大学聴覚言語障害研究センター、1986)を参照されたい。

4) ロベルジュ (1979) p. 193 の記述を、〈SUVAG〉(グベリナが所長を務める聴覚障害者教育機関)紹介用 VTR 映像により一部修正して再記述した。

5) このような身体運動の具体例については、ロベルジュ (1979) pp. 116-123 参照。

VT 法が発音能力の回復にこのような手段をとるのは、次のような理由からである。まず、特定言語のリズム・イントネーションというものは、低周波によって最もよく伝達されるが、人間の身体は一般的に低周波に対してもっとも敏感であり、聴覚障害者は高い周波数帯域よりも低い周波数帯域に対して敏感であるという生理学的事実があることである。グベリナは、ここから、特定言語の聴覚的印象を感じ取らせることによって、聴覚障害者の弁別力を改善できるのではないかという仮説をたてたのである。

次の理由は、グベリナの根本的な言語教育観に関するものである。グベリナは、言語による意志の伝達はイントネーション・身振り・態度・表情・場面の流れなどが全体として構造をなすことで行われているのであり、言語の習得はこの全体構造体系の枠内で行われるのが自然であり、かつ効果的であると主張している。この「全体性 (globability)」の概念は、音声の生成や知覚に関しては、発音器官ばかりでなく、腹筋・横隔膜・首や頭部の筋肉・四肢の振動触覚などもこれに関連しているという仮説になって現れる。「身体リズム運動」が体全体の大きな動きを特徴とすることの根拠がここにある。

以上が、聴覚障害者の聴力・発音能力の回復に対する VT 法の応用原理である。VT 法が外国語教育に応用される場合も、基本的には同じ原理が適応される。VT 法では、対象外国語音の聴き取りの困難さを、聴覚障害者の母国語音聴取の困難さとのアナロジーとしてとらえている。すなわち、学習者の聴覚は、すでに母国語の構造を持ってしまっているため、対象語音は母国語音の聴き方の構造の中でいわば「翻訳」されてしまい、これが対象言語の聴取・発音の習得、さらには文法・意味を含むその言語全体の習得を妨げているということである。したがって、外国語教育において最初にすべきことは、学習者の聴覚を対象語の聴覚へと再構造化することである。

聴覚の再構造化にあたっては、リズムとイントネーションの重要性が強調される。VT 法によれば、リズムとイントネーションは言語活動の基礎

であり、特定言語の「～語らしさ」を特徴づけるものである。ある言語の会話文を、「〈SUVAG〉機器」のフィルターを通して聞いてみると、会話可聴帯域の下限である 300 Hz より下の帯域では、会話全体が音の強弱・昇降のまとまり——すなわち、リズムとイントネーションとしてしか聞こえてこない。そして、この音のまとまりだけでも、それがもともと何語であったかを比較的容易に言い当てることのできるものである。この事実からも、リズムとイントネーションが特定言語の聴覚的印象を決定しているものであることが分かる。

前述のように、リズムとイントネーションは低周波帯域でも伝えられる音声的要素であり、人間の身体は低周波帯域の音に敏感に反応するものであった。この事実は、グベリナの「全体性」の概念を支持するものでもある。ここから、VT 法では、外国語習得に際しても「身体リズム運動」の重要性を強調し、「～語らしさ」を保証するリズムやイントネーションの習得以外に、単音の発音練習や発音矯正にも体の一部または全体の動きを使った教授法を導入している⁶⁾。このように、VT 法は、発音習得に関していえば、ミニマルペアに代表される、従来の調音音声学的教授法とは相入れないユニークな教授理念を持つ理論であると言えよう。

II. NLP について

NLP は、われわれが自分の経験を、五感からどのようにして取り込み、どのように処理し、そしてそれに基づいて行動するかについて分析する理論である。もともとは、音楽やスポーツなどでより優れたパフォーマンスを実現する能力開発原理として応用されていたが、近年チャールズ・フォークナー (Charles FAULKNER) の研究によって、外国語教育への適用が進められている。以下、フォークナー (1985) (参考文献の項参照)を

6) 外国語習得に応用された身体運動の具体例については、ロベルジュ (1979) pp. 116 参照。なお、NHK 教育テレビ「フランス語講座」の 1983 年放送分で、このような「身体リズム運動」の練習例が紹介されている。

中心に、NLP 理論の外国語習得に関する側面を見ていくことにする。

NLP の基本的仮説のひとつは、言語は人間の経験の「二次的表象 (Secondary Representation)」であるということである。人間は、外部の世界の情報を視覚・聴覚・触覚・味覚などの知覚によって内在化し、それを個人的な経験として保有している。言語は、この経験を記号化したものである。ある人が別の人に言語を介して何かを伝えるということは、話し手の内にある経験と同じような経験が、その言語によって聞き手側にも呼び起こされるということである。つまり、言語は経験そのものを表すものではなく、言語から経験そのものを得ることはできないのである。

言語が「二次的表象」であるということは、文法・訳読式の外国語学習の問題点によく現れている。このような教授法では、対象言語のことばの意味は学習者の母国語の対訳によって示される。しかし、対訳語は対象言語の話者が持つ経験と等しい経験を学習者に与えてくれるとは限らない。というより、母国語の対訳語によって喚起される経験しかもたらしめてくれないということになる。したがって、英語話者が文法・訳読式によって日本語を習得しようとしても、英語とほぼ同一の経験を保証してくれる日本語しか学ぶことができず、残りは習得されないままになるのである。

NLP のもうひとつの仮説は、人間が経験を内在化する際の表象システム (Representational System) を知覚の働きに求めていることである。知覚は、その形態 (Sensory Modality) によって、視覚 (Visual)・聴覚 (Auditory)・体感 (Kinesthetic—触覚および感情)・嗅覚 (Olfactory)・味覚 (Gustatory) に分類される。外部からの情報は、この知覚の各形態によって処理され、その総合としての記憶に蓄積される。例えば、「新幹線に乗る」という経験は、視覚では「白と青」という色彩や「流線形の車体」として処理され、記憶される。同じ経験は聴覚では「キーンという通過音」や「駅構内の雑踏」、体感では「すべるような感じの乗り心地」や「わくわくするような気持ち」あるいは「恋人との別れの悲しみ」として処理され記憶に留まるのである。この経験に「シンカンセン」という言語

てす音が聴覚処理されたもの(あるいは「新幹線」という文字例が視覚処理されたもの)が加われば、人は「新幹線」ということばの表す意味を自分の経験の表象として認識することになる。同様に、「イヌ」という言語音は、「特定の犬の姿」「犬の吠え声」「毛皮の感触」「犬の臭い」などとして処理された経験によって意味を与えられるのである。このように人間の個人的経験は、知覚の諸形態により処理され、記憶によって内在化される。言語は、この内在する経験からその意味を理解されるのである。

上述の二つの仮説、すなわち、言語が経験の表象としては二次的であるということ、経験は知覚によって処理された情報の総合であるということの2点から、NLPの外国語学習の原理が導き出される。それは、対訳に頼らず知覚の諸形態をできるだけ多く使って外界の情報を取り入れ、知覚の各形態における識別力を増大させるということである。NLPでは、このような原理を「感覚中心 (Sensory Based)」のアプローチと呼び、TPR やサイレント・ウェイを、この原理を具現化したものとして高く評価している⁷⁾。

例えば、TPRのテクニックによって「～してください」という日本語の文型を習得させるに際しては、教師が「立ってください」「座ってください」「歩いてください」のような依頼表現を与え、何人かの学習者にその依頼を実現するような動作を行わせる。教師の依頼文を聞きながら「立つ」「歩く」などの動作を行う学習者は、「タツ / アルイ...テクダサイ」という音を聴覚で、立ち上がったたり歩いたりするときの筋肉の緊張を体感で、教師が丁寧にものを頼んでいるようすを視覚で、それぞれ処理し、経験として記憶していく。サイレント・ウェイでは、対象言語の音素が異なる色の長方形で示されるが、これによって学習者は外国語音を聴覚と視覚(色と長方形の位置)およびその視覚情報から得られた体感(色がきれい・色の

7) Faulkner (1986) には、NLPの理論から種々の外国語教授法の得失を評価した一覧表がある。対象とされた教授法は、文法訳読法、オーディオ・リンガル法、TPR、サイレント・ウェイおよびサジェストベディアである。

配置が印象的)を通して処理することになる。発音に際しても教師がモデル音を与えないため、学習者が自分で正しい調音ができた瞬間には、発声器官の緊張がそのまま体感として処理される。このように、TPR やサイレント・ウエイは、知覚を重層的に使うこと (Sensory Modality Overlapping) によって、より多くの情報からより詳細で弁別性の高い経験を形作っていくのである。

従来の外国語学習のクラスでは、学習者は座って教師の発話を聞き、その意味を母国語の文字で確かめるという方法で学習していたために、聴覚と視覚しか情報処理に利用しておらず、しかも視覚で処理されているものは「二次的表象」にすぎないのであった。したがって、このような教授法でも外国語をよく習得できる学習者というのは、知覚のうちでも聴覚での情報処理が特に優位である者⁸⁾に限られるということになるのである。

以上のように、NLP は、学習過程における知覚の役割を分析することによって、外国語学習のストラテジーを、教える側からも学ぶ側からも統一的に説明できる枠組を示そうとしているのである。

III. NLP による VT 法分析

筆者は、1985年11月から1986年3月まで、上智大学外国語学部のクロード・ロベルジュ (Claude ROBERGE) 教授を中心にした VT 法研究会が行われた際に、同研究会に招かれ、日本人・外国人の外国語教員とともに VT 法の外国語教育への応用について議論する機会を得た。その結果をもとに、1986年度前期期間中に、本研究所設置の日本語科目を履修する学生を対象とした「発音矯正課外指導クラス」において、VT 法を応用して、「身体リズム運動」による単音・アクセントの発音矯正実験を行ったところ、きわめてよい結果を得た⁹⁾のである。筆者は、VT 法につい

8) NLP では、学習者各自は特定の知覚形態に偏った情報処理システム (Dominant Sensory System) を持つものとして、その知覚形態の偏りを早く発見して、未使用の知覚形態を開発することを提案している。

である程度の知識を持っていたが、応用面での成果が得られたのは始めてであった。そこで、この結果を説明できる理論的枠組を VT 法関係の文献で再確認してみた。本稿第 I 節の VT 法の紹介は、主にこの観点からまとめたものである。一方、NLP の理論から VT 法を見てみると、これによっても VT 法による発音矯正が効果的であると説明できる。本節では、NLP の学習過程論の枠組から VT 法を分析し、少なくとも発音矯正に関しては、VT 法の理論仮説が妥当性の高いものであることを示そうと思う。

NLP によれば、効果的な言語習得とは、「知覚中心」のアプローチを取り、外界からの情報処理のチャンネルを増やすことであった。この原理は、発音習得についても同じである。例えば、子音のうしろに特定の母音をつけ加えて発音してしまう学習者に対しては、同じ子音を何回も聞かせたり、母音のついた形とつかない形のミニマル・ペアをたくさん使って識別を促しても、所期の学習効果が実現できないことがあるが、これは、もともと学習者の母国語によりすでに構造化されている聴覚の情報処理能力の限界を越える情報をインプットしているためである。そこで、聴覚以外の、使われていない知覚の形態を利用して、情報処理のチャンネルを増やしてやることで識別のきっかけを与えてやる必要がある。Faulkner (1985) では、子音と母音を表す視覚情報(絵・色・記号)を手にとって、このふたつを引き離してみせることで子音が独立していることを示すという方法を提案している¹⁰⁾。これは、視覚を活用して聴覚の処理能力の不足を補ったことになるのである。

VT 法の発音訓練は、上述の Faulkner (1985) の提案よりはるかに徹底した「知覚中心」の学習法になっている。例えば、日本人の学習者に英語の〈Philip〉という人名を発音させるに際して、最終子音に母音を付加

9) この実験の内容と結果については、拙稿「発音指導の一方法」(『講座 日本語教育』第 23 分冊、1987 年 7 月刊行予定)に詳述する予定である。

10) Faulkner (1985) p. 5 参照。

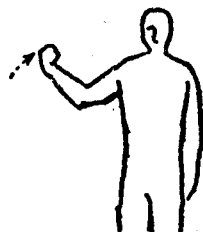
させず、しかも破裂音を完全な破裂に向かう準備段階で留まらせるために、下図に示すような身振り¹¹⁾を行わせている。



I told that to



Phil



ip.

ここで、学習者は、教師の発音を聞きながらモデルの動作をみることによって、聴覚と視覚の両方を通じてこの状況进行处理する。自分でこの身振りを行う段階になれば、体の動きは体感として処理されるが、その中で体感が受容している処理しているものは、〈I told that to Philip.〉という英語の肯定文が音声的に実現した場合の、リズム・イントネーション・緊張・強度・持続時間・周波数などの統一的全体である。これと同時に学習者は、自分・教師・他の学習者の声や姿を聴覚・視覚で同時に処理することになる。ここでは、情報処理のチャンネルが複数化しているとともに、知覚は重層的に使用され、総合されていることになる。このような方法は、母国語の表記体系によって対象言語の発音を表記して発音の材料とする方法——視覚中心であり、「二次表象」の限界を越えられない——やミナル・ペアによる方法——聴覚中心——より多くの、さらには Faulkner (1985)の提案——視覚・聴覚に及ぶが、体感未使用——よりもさらに多くの感覚を動員でき、それだけ母音を伴わない [p] 音の弁別のために細かい情報を集めうるのである。

以上のように、VT 法は、NLP という、VT 法自体の枠組とは別の

11) ロベルジュ (1979) p. 120 より引用.

理論からもその仮説の妥当性を説明することができる。一方、身体が 300 Hz 付近以下の低周波数帯域に敏感に反応し、発音習得の過程に重要な役割を果たしうるとする VT 法の理論は、体感が言語習得のための情報処理の一部を担っているとする NLP の仮説に対して、生理学的な根拠を与えるものである。また、VT 法の「全体性」の構造理論も、NLP の、経験が知覚の諸形態で処理された情報の総合であるとする考えと同一の思想的傾向を示すものと思われる。このように、NLP が VT 法や TPR のような、非「経験主義」的な、非「分節的」な教授法理論と符合し、それらを支持するような内容を持つことは、興味あるところである。VT 法も NLP も、20 世紀後半の語学教育思想史の流れに沿って、その位置づけを再検討してみる価値がありそうである。

なお、本稿をまとめるにあたって上智大学聴覚言語障害研究センターの方々から貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表すものである。

参考文献

- BANDLER, Richard & GRINDER, John, 1982. "Trance-Formations, Neuro-Linguistic Programming and the Structure of Hypnosis", Real People Press, Moab, Utah
- FAULKNER, Charles, 1985, 'The NLP of TPR' «The Language Teacher» Vol. IX, No. 13
- FAULKNER, Charles, 1986, 'Teaching How to Learn Languages' (mineographed material for <A 3 Day Workshop on the Application of NLP to Second Language Acquisition>), Learning How to Learn, Chicago
- ルナール, レイモン & ロベルジュ, クロード共著, 1983, 「SGAV 方式による外国語教授法」«Sophia Linguistica» XIV, 上智大学
- ロベルジュ, クロード編著, 1973 『ザグレブ言語教育——理論と実践——』, 学書房
- ロベルジュ, クロード編著, 1979, 『発音矯正と語学教育——ザグレブ言語教育の理論と実際——』, 大修館